

『空脳論』への道（第一報）

田所 重紀 (Shigenori Tadokoro)

東京大学大学院 総合文化研究科／茂原神経科病院

演者は現在、精神医学や認知神経科学をはじめとする実証人間諸科学において前提とされている人間観を批判的に検討し、新たに有用な人間観を提唱するための理論的研究を行なっている。そのための第一歩として、現代英米圏の心の哲学 (Philosophy of Mind) における成果を援用し、一般に「認知機能」などと総称されている心的事象—知覚、記憶、言語、思考など—を、私たち人間が日々行なっている身体活動の中に適切に位置づけることを目指している。

実証人間諸科学においては様々な認知機能が研究対象とされているが、思考をはじめとする言語と密接に関連した認知機能は、「人間を人間たらしめる心の働き」として特に重要視されている。今回の発表では、こうした言語と密接に関連した認知機能を、心の哲学の研究対象である命題的態度 (propositional attitude) とみなして議論の俎上に乗せることにする。その上で、信念や欲求などの命題的態度は、心の哲学においてこれまで論じられてきたように、大脳を中心とした神経系の生物学的状態 (以下「脳状態」と略す) と同一なのではなく、これらを含んだ全身を用いて行う「自分語り」という身体活動と同一であることを提唱する。しかも、ここで提唱する同一性は、現在主流となっているトークンの同一性ではなく、タイプの同一性であることを主張するつもりである。すなわち演者は、少なくとも命題的態度のような、言語的に表現された内容をもつ心的事象については、そのような内容をもつ「自分語り」という身体活動とタイプの同一であると考え、このように、心的事象と脳状態との間の対応関係を考える心脳問題という枠組みを解体し、心的事象を身体活動の中に位置づけることを目指す試みを、演者は「空脳論」と名づけている。

本発表ではまず、信念や欲求などの命題的態度がいかにして「自分語り」という身体活動とタイプの同一とみなされるのかについて概説する。そのための準備段階として、命題的態度全般を、身体活動や他の心的出来事を惹き起こす準備状態ないし傾向性としての「傾向的な心的状態 (dispositional mental state)」と、ある特定の時点において行為者の身体に生起する「現に生起している心的出来事 (occurrent mental event)」とに分ける。その上で、前者の「傾向的な心的状態」としての命題的態度については、従来の解釈主義の観方と同様に、行為を理に適ったものにするために行為者に帰属される理論的措定物とみなす。この場合、帰属され得る複数の命題的態度がまとまった形で全体として、そのような行為を惹き起こす全身の生物学的状態とタイプの同一であると考え、他方、後者の「現に生起している心的出来事」としての命題的態度については、そのような内容をもつ「自分語り」とタイプの同一であると考え、ここで「自分語り」とは、特殊な形式をもつ語り行動の一種であり、

周囲の他者からは聞こえないように自分に対してのみ語り、それを自分で聞くという、自己完結的な身体活動である。この自分語りは行為者の身体において生起する生物学的出来事の一つであり、環境内に生起する物的出来事や身体において生起する別の自分語りによって惹き起こされ、別の自分語りや他の身体活動を惹き起こすことができる。もっとも、私たちの環境適応的な行動を可能にしている因果的源泉の大部分が、自身の身体に備わっている生物学的メカニズムにある以上、こうした自分語りのもつ因果的影響力はそれほど大きなものではない。とはいえ、こうした自分語りの因果的影響力のもとにある身体活動は、意図的な行動や意識的な行動変容において重要な意義をもっているのである。

心身問題を巡る議論の系譜の中では、演者の立場はタイプ同一説に分類されることになるが、この立場に対しては、心的事象の多型実現可能性と非法則性という二つの観点からの批判がある。そこで次に、心的事象を自分語りという身体活動に還元することを目指す演者のタイプ同一説に対して、この二つの批判が的中するかどうかを吟味する。前者の多型実現可能性に基づいた批判に対しては、現にあるような進化の過程を経て誕生した私たち人間以外には、自分語りという特殊な身体活動をなし得る公算がほとんどない、という点を主な論拠として擁護することができる。後者の非法則性に基づいた批判に対しては、自分語りの内容と形式を区別することによって擁護することができる。たしかに、身体活動としての自分語りから独立した言語的内容の方は、別の自分語りにおける言語的内容と非法則的な関係を取り結んでいるが、自分語りという形式をもった身体活動としては、別の自分語りや他の身体活動と法則的關係を取り結んでいるのである。結局のところ、これら二つの批判はいずれも、演者の提唱するタイプ同一説には的中しないと考えられる。

最後に、このようにして信念や欲求などの命題的態度と「自分語り」という身体活動との間にタイプ同一性を認めることの意義がどこにあるのかを概説する。何より、このようなタイプ同一説をとる最大の長所は、心的因果を巡るアポリアを容易に回避できることである。すなわち、信念や欲求などの心的事象を自分語りと同一視することで、別の自分語りとしての信念や欲求さらには他の身体活動と、法則性に裏うちされた因果関係を取り結んでいることが自然に理解できるのである。さらに、自分語りにおける言語的内容を独立して扱うことで、それぞれの内容同士の理に適った（合理的ないし非法則的）関係についてもすくい取ることができる。このように、理に適った関係を取り結ぶ命題的態度を、因果的影響力をもった「自分語り」と同一視することによって、理に適った信念や欲求を抱きつつ、意識的に行動を起こしたり行動を変容させたりすることのできる私たち人間の特殊性が、改めて浮き彫りにされることになる。「空脳論」という名のもとで演者が進めている理論的研究の最終目標は、こうした人間の特殊性を、「人間を人間たらしめるような特殊な機能をもった脳」という存在に頼ることなく、人間を「自分語りする動物」とみなすことによって自然に理解することにある。本発表では、演者が最終的に提唱しようとしている人間観の概略も併せて提示したい。